

Title	分節音とアクセント(3) : 岡山方言の分析から
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学学報. 68 p.11-p.27
Issue Date	1985-03-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81036
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

分節音とアクセント (3)

——岡山方言の分析から——

角 道 正 佳

Segment and Accent (3)

——Analysis of Okayama Dialect——

Masayoshi KAKUDO

This paper treats the accentual alternations of the verbs of Okayama Dialect.

i) The accent of verb stems can be easily explained when the accent of verb stem + *ta* is regarded basic and the accent of verb stem + *ru* derived.

ii) The accent of verb stems are applied cyclically but = boundary blocks cyclicity.

- a) When Vst1 has accent Vst1&Af has accent too.
- b) When Vst1 doesn't have accent, Vst1&Af doesn't have accent, either.
- c) When Vst1 has accent, the accent of Vst1 will be the accent of Vst1=Vst2.
- d) When Vst1 doesn't have accent, accent center is assigned after Vst1 in the sequence of Vst1=Vst2.
- e) The position of accent will be assigned by general rule, i.e.

$$\phi \rightarrow ' / V \quad (C)(V) \\ \quad \quad \quad [+a] \quad Vst$$

iii) Considerations of accentual alternation of the morpheme of progressive aspect shows that its underlying from should be /o'r/, i.e. the negative from sometimes have two accent centers as in *ta'bjoora'*N(is not eating), and the second accent center can be naturally explained by attraction, since /N/ doesn't have accent but [+attraction] feature, e.g. *tabe'*N(will not eat) /ta'bEN/. In the case of *ta'bjooru* (is eating), the accent of /o'r/ dissapears by the general rule to erase the second accent when the morpheme has [—predonimating] feature.

iv) The underlying from of the morpheme of perfect aspect should be /to'r/, i.e. it should not be /te=or/ because *te*-reduction is not a natural rule.

It should not be /t=or/ either, because another problem arises as to how to block ungrammatical from as *t{oor}* (or *t{or}*).

∨) Various morphemes can be added to verb stem, their types of accent can be summerized as follows.

	[+predominating]	[−predominating]	
		[+attraction]	[−attraction]
[+accented]	jo'o (volitional) na' (negative) 'ro (imperative)	e'e (imperative) o'r (progressive)	rja'a (conditional)
[−accented]	mas (polite)	ta (past) te	ru (present) i (present) N (negative)

2.3.6 アクセント

2.3.6.1 動詞語幹のアクセント

動詞語幹には *sase*, *rare* などのような単独では用いられない形態素 (以下 Af) 以外に, *das*, *hadzime* などのように, 単独で用いられる形態素 (以下 Vst) が付加されて, 全体で動詞語幹を形成する。¹⁾ これらが付加された場合のアクセントは次のようになっている。例として<食べる>と<開ける>を採り上げる。

	語 幹	ru の前	ta の前
Vst1	tabe [+a]	tabe' & ru	ta'be & ta
Vst1 & Af	tabe & sase [+a] [+a]	tabe & sase' & ru	tabe & sa'se & ta
Vst1=Vst2	tabe=das [+a]	ta'be=das & u	ta'be=das & i & ta
Vst1	2ake [−a]	2ake & ru	2ake & ta
Vst1 & Af	2ake & sase [−a] [−a]	2ake & sase & ru	2ake & sase & ta

Vst1=Vst2 ʔake=das ʔake'=das & u ʔake'=das & i & ta
[-a]

Vst:動詞語幹 Af:接辞 [+a]:[+アクセント核] [-a]:[-アクセント核]

&:形態素境界 =:Vst と Vst の間にある境界

ta の前に現れる形には、次のような特徴があることがわかる。語幹または語幹の一部がアクセント核を持つか持たないかということに注目すると、次のように言い表すことができる。

- (a) Vst1 にアクセント核があれば、Vst1&Af 全体はアクセント核をもつ。
- (b) Vst1 にアクセント核がなければ、Vst1&Af 全体はアクセント核を持たない。
- (c) Vst1 にアクセント核があれば、Vst1=Vst2はVst1 のアクセント核が全体のアクセント核になる。
- (d) Vst1 にアクセント核がなければ、Vst1=Vst2はVst1 の直後にアクセント核を持つ。

アクセント核がある場合は、次のように言い表すことができる。

- (e) Vst にアクセント核があると、母音語幹では語幹末から数えて二つめのモーラの直後にアクセント核があり、子音語幹では最後の母音の直後にアクセント核がある。²⁾

一方、ru の前では、

- (f) (a ~ e) によって決まったアクセント核の位置が、ru から数えて2モーラ前にあれば、ru の直前に移される。ただし、アクセント核と ru の間には=があってはならない。

以上の表現を規則の形に書いてみると次のようになる。

(a, b) からは、

$$(2-41) \text{ Vst} \rightarrow [\alpha a] / [\begin{matrix} [X] & [Y] \\ [\alpha a] \text{ Vst} & \text{Af} \end{matrix}] \quad (\text{特徴付与})$$

(d) からは、

$$(2-42) \phi \rightarrow ' / \begin{matrix}] \text{ } [X] \\ [-a] \text{ Vst} & \text{Vst} & \text{Vst} \end{matrix} \quad (\text{アクセント核付与})$$

(a) (c) (e) からは、

$$(2-43) \phi \rightarrow ' / \text{V} \begin{matrix} \text{ } (C) (V) \\ [+a] \text{ Vst} & \text{Vst} \end{matrix} \quad (\text{アクセント核付与})$$

(f) からは、

$$(2-44) \text{ M'M \& ru} \rightarrow \text{MM' \& ru} \quad (\text{アクセント核牽引})$$

ただし、'M \& は = を含まない。

2.2.5で示したアクセント核牽引(2-27)は形容詞の終止形及び連体形に適用されるものであったが、(2-44)は動詞の終止形及び連体形に適用されるものであるから、次のようにまとめられる。

$$(2-45) \quad M'M \rightarrow MM' / \text{---} \& \left\{ \begin{array}{l} \text{終止形} \\ \text{連体形} \end{array} \right\} \quad (\text{アクセント核牽引})$$

ただし、'M&は=を含まない。

次に派生例を示してみよう。

/tabe & ru/ [+a]	/tabe & sase & ru/ [+a]	/tabe=das & ru/ [+a]	
	tabe & sase & ru [+a]		(2-41) 特徴付与
			(2-42) アクセント核付与
ta'be & ru	tabe & sa'se & ru	ta'be=das & ru	(2-43) アクセント核付与
tabe' & ru	tabe & sase' & ru		(2-45) アクセント核牽引
		ta'be=das & i & ta	(2-37) i 挿入
		ta'be=daʃ & i & ta	(2-40) 口蓋化
<hr/>			
tabe'ru	tabesase'ru	ta'bedaʃita	
<hr/>			
/ʔake & ru/ [-a]	/ʔake & sase & ru/ [-a]	/ʔake=das & ru/ [-a]	
	ʔake & sase & ru [-a]		(2-41) 特徴付与
		ʔake'=das & ru	(2-42) アクセント核付与
			(2-43) アクセント核付与
			(2-45) アクセント核牽引
		ʔake'=das & i & ta	(2-37) i 挿入
		ʔake'=daʃ & i & ta	(2-40) 口蓋化
<hr/>			
ʔakeru	ʔakesaseru	ʔake'daʃita	

<やりだす> / jar =das&ru/→jari'dasu の派生については、(2-32) の i 挿入がアクセントに関
[-a]

する規則に先行すると考えれば問題はない。すなわち分節音に関する規則のなかにはアクセントに関する規則に先行するものがあることになる。³⁾

次に動詞語幹に二つ以上の形態素が付いている場合についてみていこう。

	ru の前	ta の前
Vst & Af & Af	tabe & sase & rare' & ru [+a] [+a] [+a]	tabe & sase & ra're & ta [+a] [+a] [+a]
Vst=Vst & Af	ta'be=das & ase & ru [+a]	ta'be=das & ase & ta [+a]
Vst & Af=Vst	tabe & sa'se=das & u [+a] [+a]	tabe & sa'se=das & i & ta [+a] [+a]
Vst & Af & Af	ʔake & sase & rare & ru [-a] [-a] [-a]	ʔake & sase & rare & ta [-a] [-a] [-a]
Vst=Vst & Af	ʔake'=das & ase & ru [-a]	ʔake'=das & ase & ta [-a]
Vst & Af=Vst	ʔake & sase'=das & u [-a] [-a]	ʔake & sase'=das & i & ta [-a] [-a]

特徴付与の観点から見ると&については既に述べた(a)(b)が循環的(cyclic⁴⁾)に適用されていることがわかる。しかし一旦=があると、それより後ろにある形態素は考慮しなくてもよいことがわかる。すなわち途中に=がなければ循環的に(a)(b)が適用されるが、=があるとその段階で(c)(d)が適用され、それでストップするわけである。アクセント核の位置も(e)(f)が適用されていることがわかる。アクセント核牽引は&を飛び越えることはできるが、=を飛び越えることはできない。このことは ta の付いた時のアクセントが基本であり、ru が付いた時のアクセントは派生的なものであることを主張する根拠にもなっている。⁵⁾

2.3.6.2 joor, tor, tok

2.3.6.1で動詞語幹の形、すなわち ru または ta の前に現れる形のアクセントについて論じたが、これら以外にも ru または ta の前に現れるものがある。次に継続相、完了相のアクセントについて観察してみよう。

	継続相現在	継続相過去	完了相現在	完了相過去
有核語幹	ta'bjooru	ta'bjotta	ta'betoru	ta'betotta
無核語幹	ʔakjo'oru	ʔakjo'otta	ʔaketo'ru	ʔaketo'tta

表1 (継続相 joor, 完了相 tor が付いた時の実際のアクセント)

継続相を表す形態素 joor, 及び完了相を表す形態素 torがAf (接辞) と Vst (動詞語幹) のうち

のどちらに属するかを考えてみなければならない。分節音だけ見ていると、これらは当然 Af (接辞) に属するべきであることになるが、もしそうであれば、アクセントな次のようになっていなければならない。

	継続相現在	継続相過去	完了相現在	完了相過去
有核語幹	tabjo'oru	tabjo'otta	tabeto'ru	tabeto'tta
無核語幹	ʔakjooru	ʔakjootta	ʔaketoru	ʔaketotta

表 2 (継続相 joor, 完了相 tor が Af (接辞) であると考えた場合に期待されるアクセント)

逆に, joor, tor が Vst (動詞語幹) であるならば, アクセントは次のようになっていることが期待される。

	継続相現在	継続相過去	完了相現在	完了相過去
有核語幹	ta'bjooru	ta'bjotta	ta'betoru	ta'betotta
無核語幹	ʔakjo'oru	ʔakjo'otta	ʔake'toru	ʔake'totta

表 3 (継続相 joor, 完了相 tor が Vst (動詞語幹) であると考えた場合に期待されるアクセント)

表 3 が表 1 と違うのは ʔake'toru と ʔake'totta だけである。従って継続相 joor は Vst (動詞語幹) であると考えたほうが, アクセントの説明はうまくいくことになる。

ところで, 継続相 joor が Vst (動詞語幹) であると考えた場合に, ʔakjo'oru の分析が問題になる。というのは, ʔakjo'oru はなぜアクセント核牽引 (2-45) によって ʔakjoo'ru にならないのかという問題があるからである。ʔakjo'oru がもし ʔakjo'=or&u のように分析できるのであれば, この問題は解決できることになる。そのためには, joor を jo=or のように分析できればよいわけである。同様に, tor が t=or のように分析でき, <〜ておく> tok が t=ok のように分析できれば, 非常に都合がよいことになる。この分析が正しければ, jo=or の or と t=or の or とは同じ形態素であると考えられるし, t=or の t と t=ok の t も同じ形態素であると考えられるからである。

それではなぜ ʔake'toru, ʔake'totta とならずに, ʔaketo'ru, ʔaketo'tta となるのであろうか。それは, jari'dasu が [jar] i [das] ru ではなく [[[jar] i] [das]] ru のようになっていると考えられるのと同様に, ʔaketo'ru が [[[ʔake] t] [or]] ru のようになっていると考えられるからである。つまり, アクセント核は二つある Vst のうち最初の Vst の直後 (すなわち [[] _ []] の位置にある。この位置が実は = で示されているのである。) と考えられ, ʔake&t'=or&ru → ʔake&t=o'r&ru のアクセント核移動はアクセント核牽引 (2-45)⁶⁾ によるものではなく, アクセント核移動 (2-7) によるものである。アクセント核牽引は途中に = を含んでいてはならない (ʔake'=das&ru → * ʔake=da's&ru) が, アクセント核移動は = を含んでいてもかまわない。

2.3.6.2 継続相 /or/

＜書いている（継続相）＞ ka'kjooru を ka'kjo=or&u と分析するのは＜開けている（継続相）＞ 2akjo'oru を 2akjo'=or&u と分析したり＜落ちている（継続相）＞ 2o'tjuuru を 2o'tju=ur&u と分析したりするほど容易ではない。2akjo'=or&u の 2akjo が 2ake の交替形であること、及び 2o'tju=ur&u の 2o'tju (<2o'tfju) が 2otfi の交替形であることには問題がないが、ka'kjo=-or&u の ka'kjo は kak の交替形といえるであろうか。これらの関係を表にしてみると次のようになる。

＜開ける＞		＜落ちる＞		＜書く＞	
2ake	ru	2otfi	ru	kak	ru
2akjo	or u	2otfu ur u (2otfju ur u) ⁷⁾		kakjo	or u

＜開ける＞の語幹 2ake ~ 2akjo における e ~ jo の交替と、＜落ちる＞の語幹 2otfi ~ 2otfu (2o'tfi ~ 2otfju) 交替は、名詞や形容詞の音韻交替と同じ性質のものだと考えられる。すなわち、2akjo=or&u 及び 2otfu=ur&u (2otfju=ur&u) を /2ake=or&ru/, /2otfi=or&ru/ から既に示した規則によって派生することができる。しかし kakjooru は /kak=or&ru/ から派生することができない。＜書く＞の語幹 kak ~ kakjo において見かけ上は φ と jo が交替しているのは実は i と jo の交替と考えることができる。すなわち、kakjooru は /kak&i=or&ru/ から派生されたと考えることができる。子音語幹の動詞に Vst が付く場合、子音語幹の後に i が付け加わるという規則があることは既に見たとおりであるが、今問題にしている継続相の形態素が Af（接辞）でなく Vst（動詞語幹）であると考えれば、以上述べたことは説明がつくことになる。ところでこのようにして挿入された i は進行同化を引き起こさない。＜書いている（継続相）＞は ka'kjooru であって ka'kjuuru ではないし＜やっている（継続相）＞は jarjo'oru であって jarju'uru ではない。一方、語幹末に i がある動詞（上一段動詞）は＜起きている（継続相）＞ o'kjuuru, ＜着ている（継続相）＞ kju'uru のように進行同化を引き起す。この違いを規則の面で扱うためには、進行同化の規則が適用される条件を厳しくするかあるいは、進行同化が i 挿入より先に適用されるように規則の順序づけをしておけばよい。今は後者の方法によって派生例を示してみよう。

/2ake=or&ru/ [-a]	/kak=or&ru/ [+a]	/jar=or&ru/ [-a]	(2-12) 進行同化
	kak&i=or&ru	jar&i=or&ru	(2-32) i 挿入
2ake'=or&ru		jar&i'=or&ru	(2-42) アクセント核付与
	ka'k&i=or&ru		(2-43) アクセント核付与
2akje'=or&ru	ka'k&jj=or&ru	jar&jj'=or&ru	(2-1) j 挿入
2akjo'=or&ru	ka'k&jj=or&ru	jar&jj'=or&ru	(2-7) 逆行同化
2akjo'=or&u	ka'k&jj=or&u	jar&jj'=or&u	(2-23) 子音消去
2akjo'oru	ka'kjooru	jarjo'oru	

/ʔoki=or & ru/ [+a]	/ʔotʃi=or & ru/ [+a]	/ki=or & ru/ [-a]	
ʔoki=ur & ru	ʔotʃi=ur & ru	ki=ur & ru	(2-12) 進行同化
			(2-32) i 挿入
		ki'=ur & ru	(2-42) アクセント核付与
ʔo'ki=ur & ru	ʔo'tʃi=ur & ru		(2-43) アクセント核付与)
ʔo'kji=ur & ru	ʔo'tʃji=ur & ru	kji'=ur & ru	(2-1) j 挿入
ʔo'kju=ur & ru	ʔo'tʃju=ur & ru	kju'=ur & ru	(2-7) 逆行同化
ʔo'kju=ur & u	ʔo'tʃju=ur & u	kju'=ur & u	(2-23) 子音消去
	ʔo'tʃu=ur & u		j 消去
ʔo'kjuuru	ʔo'tʃuuru	kju'uru	

継続相の過去の形の場合は<開けていた(継続相)> ʔakjo'otta, <やっていた(継続相)> jarjo'otta, <着ていた(継続相)> kju'utta のように長母音+ tta の形に対し, <書いていた(継続相)> ka'kjotta, <起きていた(継続相)> ʔo'kjutta, <落ちていた(継続相)> ʔo'tʃutta のように短母音+ tta のバリエントもある。⁸⁾ o'otta (~u'utta) のアクセント核がない場合に, otta (~utta) になるといえる。この規則は (2-33) で既に示したものであるが, ここでは抽象的な基底形を設定したので改めて規則の定式化をしておこう。規則の順序としてはアクセント核付与の後であればどこでもよいが, 進行同化をアクセント核付与の前に置いた以上, この規則は逆行同化よりも後に置くべきではないかと思われる。

$$(2-34) \quad \begin{array}{l} \text{o o t a} \rightarrow \text{o t t a} \\ \text{u u t a} \rightarrow \text{u t t a} \end{array}$$

2.3.6.3 完了相 /t=or/

<食べている(完了相)> ta'betoru, <書いている(完了相)> ka'itoru, <捨てている(完了相)> ʃiteto'ru, <やっている(完了相)> jatto'ru から完了相として /t=or/ という要素を取り出すことができる。岡山方言としてはこれ以上抽象的な形(例えば/te=or/)を基底形として選ぶことはできない。なぜなら /te=or/ は一般的な規則によって tʃoo となってしまうので, 上に述べた形はそれぞれ ta'betʃooru, ka'itʃooru, ʃitetʃo'oru (または ʃitetʃoo'ru), jatʃo'oru (または jatʃoo'ru) になってしまうからである。しかし今度は逆に /t=or/ には i 挿入が適用され t&i=or となり, 最終的には tʃoor となってしまう。どちらにしても結果的には正しくない形(しかも同じ形)が派生されてしまうことになる。i 挿入を阻止するためには /te=or/ という基底形を設定しておき, i 挿入, te ⁹⁾縮約という順に規則を適用する方法しかなさそうである。完了相と継続相の違いは te があるかないかである。次に派生例を示してみよう。動詞語幹に te が付くと 2.3.5 で扱ったのと同じ変化が起こる。

/tabe & te=or & ru/ [+a]	/kak & te=or & ru/ [+a]	
tabe & t=or & ru	kak & t=or & ru	(2-32) i 挿入 te縮約
ta'be & t=or & ru	ka'k & t=or & ru	(2-42) アクセント核付与
ta'be & t=or & u	ka'k & t=or & u	(2-43) アクセント核付与
	ka'k & i & t=or & u	(2-23) 子音消去
	ka' & i & t=or & u	(2-37) i 挿入
		(2-38) イ音便化
ta'btoru	ka'itoru	
/jite & te=or & ru/ [-a]	/jar & te=or & ru/ [-a]	
jite & t=or & ru	jar & t=or & ru	(2-32) i 挿入 te縮約
jite & t'=or & ru	jar & t'=or & ru	(2-42) アクセント核付与
		(2-43) アクセント核付与
jite & t=o'r & ru	jar & t=o'r & ru	(2-5) アクセント核移動
jite & t=o'r & u	jar & t=o'r & u	(2-23) 子音消去
	jat & t=o'r & u	(2-34) 促音便化
jiteto'ru	jatto'ru	

<～ておく> /te=ok/ の場合も同じように考えられる。完了相 /te=or/ については2.3.6.7で再び論じる。

2.3.6.4 自己主張型

志向形 jo'o, 否定形 na'i はどんな語幹に付いても自分自身のアクセント核が現れる。こういった特徴をもっている形態素を自己主張型のアクセントをもった形態素と呼ぶことにした。これらは形態素自体が「+自己主張型」([+p])と略記する)という特徴(feature)をもっていると考えることができる。この特徴をもった形態素の前では、アクセント核は(2-26)によって消去される。その形態素自体が核をもっていなくても「+自己主張型」の形態素(<ます>/mas/)もある。<食べる>を例にして派生例を示すと次のようになる。

/tabe & jo'o/ [+a] [+p]	/tabe & na' & i / [+a] [+p]	/tabe & mas & ru/ [+a] [+p]	
ta'be & jo'o	ta'be & na' & i	ta'be & mas & ru	(2-43) アクセント核付与
tabe & jo'o	tabe & na' & i	tabe & mas & ru	(2-26) アクセント核消去
tab & jo'o			(2-5) 母音消去
		tabe & mas & u	(2-23) 子音消去
tabjo'o	tabena'i	tabemasu	

2.3.6.5 アクセント核牽引

終止形（及び連体形）の ru, 否定形 N, 仮定形 rja'a はアクセント核牽引によるものと考えられる。アクセント核牽引の規則は次のようになる。この規則は＝を飛び越えて適用されてはならない。＜開けている（継続相）＞ ?akjo'oru, ＜やっている（継続相）＞ jarjo'oru が ?akjoo'ru, jarjoo'ru とならないのはそのためである。アクセント核牽引を引き起す形態素は [+アクセント核牽引] ([+A] と略記する) という特徴をもっていると考えることができる。

$$(2-46) \quad M'M \rightarrow MM' \quad / \quad \underline{\quad} \quad [\quad] \quad (+A)$$

ただし、'M は＝を含まない。

/tabe & ru/ [+a] [+A]	/kak & ru/ [+a] [+A]	/jite & ru/ [-a] [+A]	/jar & ru/ [-a] [+A]	
ta'be & ru	ka'k & ru			(2-43) アクセント核付与
tabe' & ru				(2-46) アクセント核牽引
	ka'k & u		jar & u	(2-23) 子音消去
tabe'ru	ka'ku	jiteru	jaru	
/tabe & N/ [+a] [+A]	/kak & N/ [+a] [+A]	/jite & N/ [-a] [+A]	/jar & N/ [-a] [+A]	
	kak & a & N		jar & a & N	(2-31) a 挿入
ta'be & N	ka'k & a & N			(2-43) アクセント核付与
tabe' & N	kak & a' & N			(2-46) アクセント核牽引
tabe'N	kaka'N	jiteN	jaran	

2.3.6.6 アクセント核消去

仮定形はアクセント核牽引を引き起こす形態素であると共に、アクセント核消去が適用される形態素でもある。というのは、rja'a のアクセント核はアクセント核がある語幹に付いた場合は消去されるからである。[+自己主張型] ([+p]) という特徴をもっていない形態素のうちアクセント核を有するものはすべて [-自己主張型] ([-p]) という特徴をもっていると考えることができる。アクセント核をもった形態素の後にこの特徴をもっている形態素が付くと、後ろのほうのアクセント核が消去される。

$$(2-47) \quad ' \rightarrow \phi \quad / \quad ' X \& Y \quad \underline{\quad} \quad Z \quad (-p)$$

/tabe & rja'a/ [+a] [+A, -p]	/kak & rja'a/ [+a] [+A, -p]	/jite & rja'a/ [-a] [+A, -p]	/jar & rja'a/ [-a] [+A, -p]	
ta'be & rja'a	ka'k & rja'a			(2-43) アクセント核付与
tabe' & rja'a				(2-46) アクセント核牽引
tabe' & rjaa	ka'k & rjaa			(2-47) アクセント核消去
	ka'k & jaa		jar & rja'a	(2-23) 子音消去
tabe'rjaa	ka'kjaa	jiterja'a	jarja'a	
禁止 na の場合にも同じようになっている。				
/tabe & ru & 'na/ [+a] [+A] [-p]	/kak & ru & 'na/ [+a] [+A] [-p]	/jite & ru & 'na/ [-a] [+A] [-p]	/jar & ru & 'na/ [-a] [+A] [-p]	
ta'be & ru & 'na	ka'k & ru & 'na			(2-43) 核付与
tabe' & ru & 'na				(2-46) 核牽引
tabe' & ru & na	ka'k & ru & na			(2-47) 核消去
	ka'k & u & na		jar & u & 'na	(2-23) 子音消去
tabe'runa	ka'kuna	jiteru'na	jaru'na	
母音語幹動詞には 'na が直接付く型もある。				
/tabe & 'na/ [+a] [-p]	/jite & 'na/ [-a] [-p]			
ta'be & 'na				(2-42) 核付与
ta'be & na				(2-47) 核消去
ta'bena	jite'na			

2.3.6.7 命令形のアクセント

A型のものは母音語幹に付く /ro/ が「+自己主張型」であるという指定をしておくだけでうまく派生できる。子音語幹には /e/ が付く。＜食べる＞＜書く＞＜捨てる＞＜やる＞を例にあげる。

/tabe & 'ro/ [+a] [+p]	/kak & e/ [+a]	/jite & 'ro/ [-a] [+p]	/jar & e/ [-a]	
ta'be & 'ro	ka'k & e			(2-43) アクセント核付与
tabe & 'ro				(2-26) アクセント核消去
tabe'ro	ka'ke	jite'ro	jare	

B型のものはすこし厄介である。＜食べる＞＜書く＞＜捨てる＞＜やる＞の命令形について検討してみよう。ta'beeをta'be&e と分析すると、ka'keeはka'k&ee となる。もし ee を e から導くのであれば、ta'be&φ, ka'k&e と分析できる。しかし jite'e, jare'e の説明に困ることになる。すなわち、ta'be&φ → ta'bee, ka'k&e → ka'kee, jite&φ → jite'e, jar&e → jare' ということになるので、ta'be&φ → ta'bee, ka'k&e → ka'kee は単に長母音化すればよいけれども、jite&φ → jite'e,

jar&e → jare'e は長母音化以外にアクセント核の位置の修正が必要になるからである。ta'be&e → ta'bee, ka'k&e → ka'kee, ʃite'&e → ʃite'e, jar'&e → jare'e と考えてもアクセント核の位置の修正が必要である。したがって, ta'be&e'e → ta'bee, ka'k&e'e → ka'kee, ʃite&e'e → ʃite'e, jar&e'e → jare'e と考えるのが最も簡単なようである。必要な規則はアクセント核消去 (2-26) と母音消去 (2-5) である。¹⁰⁾

/tabe & e'e/ [+a] [-p]	/kak & e'e/ [+a] [-p]	/ʃite & e'e/ [-a] [-p]	/jar & e'e/ [-a] [-p]	
ta'be & e'e	ka'k & e'e	ʃite & e'e	jar & e'e	(2-42) アクセント核付与
ta'be & ee	ka'k & ee			(2-47) アクセント核消去
ta'b & ee		ʃit & e'e		(2-5) 母音消去
ta'bee	ka'kee	ʃite'e	jare'e	

2.3.6.8 継続相, 完了相の否定形アクセント

継続相, 完了相の否定形はときにはアクセント核が二個所現れることがある。〈食べる〉と〈開ける〉の例を見よう。

	継続相現在	継続相過去	完了相現在	完了相過去
有核語幹	ta'bjoora'N	ta'bjoora'nanda	ta'betora'N	ta'betora'nanda
無核語幹	ʔakjo'ora'N	ʔakjo'ora'nanda	ʔaketora'N	ʔaketora'nanda

二つめのアクセント核は最初のアクセント核ほど顕著ではないが、確かにあるといわなければならない。一般にアクセント核が高々一個所現れる範囲をアクセント句と呼ぶことにすると、継続相, 完了相の否定形は2アクセント句から構成されていると考えなければならないことになる。それではアクセント句の境界 (以下%を用いる) はいったいどこにあるのであろうか。常識的に考えて否定を表す要素の前にあると思われる。すなわち, 〈食べていない (継続相)〉は /tabe=or%N/, 〈食べていなかった (継続相)〉は /tabe=or%nan&ta/ のようになっているものと思われる。ところで第二番目のアクセント核はどこから現れたのであろうか。否定形自体は既に2.3.6.5で見たようにアクセント核を持っていないので, このアクセント核は語幹にあったものがアクセント核牽引 (2-46) によって否定の要素を直ぐ前に移動されてきたものであるとしか考えられない。アクセント核牽引 (2-46) は=を飛び越えては適用されないので, 結局このアクセント核は /or/ がもともと持っていたものであると考えなければならないことになる。したがって〈食べていない (継続相)〉は /tabe=o'r%N/ に a 挿入 (2-31) が適用されて tabe=o'r&a%N になり, アクセント核付与 (2-43) によって ta'be=o'r&a%N になり, アクセント核牽引 (2-46) によって ta'be=o'r&a%N となったものである。それではなぜ〈食べている (継続相)〉 /tabe=o'r&ru/ が ta'bjo'oru にならないのかといえは, 途中で%がないのでアクセント核は一個所しか実現しないからである。

〈食べていない (完了相)〉の場合は /tabe&te=o'r%N/ から派生したものと考えられるが, そ

うすると<開けていない (完了相)>は /ʔake&te=o'r%N/ から派生したものであることになるので、<開けている (完了相)>は /ʔake&te=o'r&ru/ から派生すべきことになる。それでは、2.3.6.3 で示したアクセント核付与 (2-42) によるアクセント核はどうなるのであろうか。/ʔake&te=o'r&ru/ にアクセント核付与 (2-42) が適用されると ʔake&t'=o'r&ru になり、これにさらにアクセント核移動 (2-5) が適用されると二つのアクセント核が合体して ʔake&t=o'r&ru になるように見えるけれども、同じことを<開けていない (完了相)> /ʔake&te=o'r%N/ に適用すると、ʔake&t'=o'r&a%N —— (アクセント核牽引) → ʔake&t'=or&a%'N —— (アクセント核移動) → ʔake&t=o'r&a%'N となる。二つのアクセント核のうちで第二番目のほうが残らなければならない理由はないので、結局 ʔake&t=o'r&a%N という正しくない形が派生されてしまうことになる。アクセント核移動 (2-5) をアクセント核牽引 (2-46) より先に適用すると ʔake&t'=o'r&a%N —— (アクセント核) → ʔake&t=o'r&a%N となって二つのアクセント核は合体してしまい正しい形が得られることは得られるが、別の考えかたもできる。それは /or/ には初めからアクセント核があり (すなわち (/o'r/) 完了相の場合はアクセント核付与 (2-42) が適用されないと考えるのである。継続相 /o'r/ が付いた場合は依然としてアクセント付与 (2-42) は適用される (そうしなければ ʔakjo'oru が派生できない)。/te=o'r/ は結局は /to'r/ でアクセントの面では何も問題はなく、しかもこれが最も簡単であると考えられる。te 縮約が i 挿入 (2-32) の後で適用されているという不自然さもなくなる。無核語幹に継続相及び完了相の否定形の要素が付いた場合、アクセント核が一つしか現れないという事情を考えると、こう考えるのがおそらくもっとも自然だと思われる。次に派生例をあげよう。

/tabe=o'r & ru/ [+a] [-p] [+A]	/tabe=o'r %N/ [+a] [-p] [+A]	/tabe & to'r %N/ [+a] [-p] [+A]	
	tabe=o'r & a %N	tabe & to'r & a %N	(2-31) a 挿入
			(2-42) 核付与
ta'be=o'r & ru	ta'be=o'r & a %N	ta'be & to'r & a %N	(2-43) 核付与
	ta'be=or & a %'N	ta'be & tor & a %'N	(2-46) 核牽引
ta'be=or & ru			(2-26) 核消去
ta'bje=or & ru	ta'bje=or & a %'N		(2-1) j 挿入
ta'bjo=or & ru	ta'bjo=or & a %'N		(2-6) 逆行同化
ta'be=or & u			(2-28) 子音消去
ta'bjooru	ta'bjoora'N	ta'betora'N	

/ʔake=o'r & ru/ [-a] [-p] [+A]	/ʔake=o'r % _N / [-a] [-p] [+A]	/ʔake & to'r % _N / [-a] [-p] [+A]	
	ʔake=o'r & a % _N	ʔake & to'r & a % _N	(2-31) a 挿入
ʔake'=o'r & ru	ʔake'=o'r & a % _N		(2-42) 核付与
			(2-43) 核付与
	ʔake'=or & a % _N	ʔake & tor & a % _N	(2-46) 核牽引
ʔake'=or & ru			(2-26) 核消去
ʔakje'=or & ru	ʔakje'=or & a % _N		(2-1) j 挿入
ʔakjo'=or & ru	ʔakjo'=or & a % _N		(2-6) 逆行同化
ʔakjo'=or & u			(2-28) 子音消去
<hr/>			
ʔakjo'oru	ʔakjo'ora' _N	ʔaketora' _N	

/tok/ の場合も同じように /to'k/ から派生され则认为られる。

2.3.6.9 まとめ

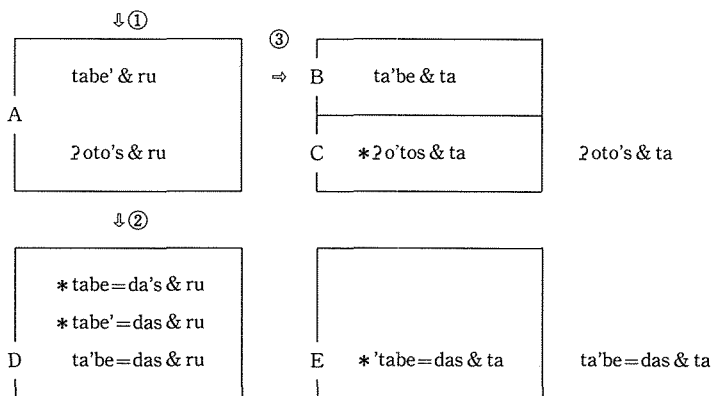
以上述べてきたことをまとめてみよう。

- i) 動詞の語幹のアクセントは ta が付いた時のアクセントを基本と考え、 ru が付いた時のアクセントは派生的なものとする と簡潔に説明できる。
- ii) 動詞語幹に Vst が付くか Af が付くかによって、動詞語幹全体のアクセント核が違う。
- iii) 動詞語幹には他にも様々なものが付く。その時のアクセントをタイプ別に表にすると次のようになる。

	自己主張型 ([+p])	非自己主張型 ([-p])	
		アクセント核牽引を引き起こさない形態素 ([-A])	アクセント核牽引を引き起こす形態素 ([+A])
アクセント核がある 形態素 ([+a])	jo'o (志向性) na' (否定形) 'ro (命令形)	e'e (命令形) o'r (継続相)	rja'a (仮定形)
アクセント核がない 形態素 ([-a])	mas (丁寧)	ta (過去形) te	ru (終止形) i (終止形) N (否定形)

註

- 1) 厳密にいうと Vst か Af かは単独で用いられるか否かではない。分節音の面では子音語幹動詞に i 挿入を必要とする形態素が Vst であるということになる。〈ます〉/mas/ はアクセントの面では [+自己主張型] であるが、分節音の面では i 挿入を必要とするので Vst である。伝統的な用語で言い換えるなら、連用形に付くのが Vst であり、連用形以外の活用形に付くのが Af であることになる。
- 2) この規則によって、〈食べる〉tabe, 〈書く〉kak, 〈落とす〉.2otos は ta'be, ka'k, 2oto's となる。
- 3) 規則の順序については部分的にしか述べていないがもちろん全体の順序を正しく記述しておく必要がある。名詞と形用詞のアクセントは分節音の影響を受けないので、アクセントに関する規則が分節音に関する規則に先行すると考えられる。しかし、動詞のアクセントは、規則の書き方にもよるけれども、アクセントに関する規則に先行する分節音の規則があると考えたほうが、直観にあうと思われる。アクセントに関する規則の中には循環的に適用されるものもあるので、規則の順序付けは当然循環性の問題とも関連してくる。分節音に関する規則は循環的である必要があるのかないのかという点についても吟味しないと全体の順序付けはできない。詳細は「分節音とアクセント(4)」以降を参照。
- 4) 循環的 (cyclic) というのは、内側の形態素から順番に適用されることをいう。たとえば〈食べさせられる〉は [[[tabe] sase] rare] ru] のようになっているので、最初に tabe, 次にtabesase,次にtabesaserare,最後にtabesaserareru に規則が適用される。
- 5) ru が付いた時のアクセントが基本であると考えると次のような規則が必要になる。



まず A を派生するための規則 ①として

$$\textcircled{1} \quad \phi \rightarrow ' / V \text{---} \begin{matrix} (C) \\ [+a] \end{matrix} \text{ Vst} \left\{ \begin{matrix} \& \\ = \end{matrix} \right\}$$

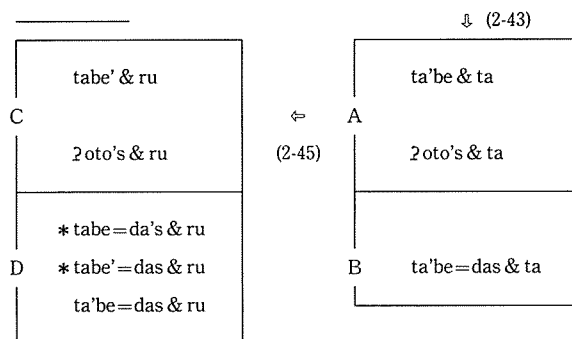
Vst=Vst の場合はさらに ②が必要であるから

$$\textcircled{2} \quad M' \rightarrow 'M / \text{---} =$$

ta が付いた時のアクセントを説明するために A から B だけに適用され C や E には適用されないような規則 ③として

$$\textcircled{3} \quad M' \rightarrow 'M / \text{---} \& \text{ ta}$$

ta が付いた時のアクセントを基本と考えると次のような規則が必要になる。



まず A および B を派生するための規則 (2-43)

$$(2-43) \quad \phi \rightarrow ' / V \text{ ____ } (C) (V)] ([X])$$

$$[+a]Vst \quad Vst$$

ru が付いた時のアクセントを説明するために A から C だけに適用される規則 (2-45)

$$(2-45) \quad M' M \rightarrow MM' / \text{ ____ } \& ru$$

以上から, ta が付いた時のアクセント核を基本と考えたほうが簡単であることがわかる。

- 6) 2ake&t'=or&ruの=が仮に&だとしてもアクセント核牽引(2-45)の構造記述に合わないから, 問題にするには及ばないように思われるかもしれないけれども, アクセント核牽引は実際には1モーラ右に移動するとは限らない。たとえば, 岡山方言Ⅰ, Ⅱのスタイルにおける<食べよう>tabjo'o,<捨てよう>jitjooのアクセントを説明するためには, 次のようなアクセント核牽引が必要になる。

$$\sigma \rightarrow ' / .. [+a] .. \& jo \text{ ____ } o$$

志向形

- 7) 既に述べたように, 形態素内部には分節音の規則が適用されているものとするので, <落ちる>の基底形は, /2oti&ru/ではなくて/2otji&ru/である。したがって, 2o'tju=ur&ruから2o'tj'ur=ur&ruのプロセスにはj消去が必要となる。
- 8) Talbot (1979 : 38) に次のような主旨のことが書かれている。彼の言っていることを表にしてみると次のようになる。(yは筆者のj, は長母音を表している。)

yoru 10/84 (12%) 全員が30才以上	yōru 74/84 (88%)	女性はyoruだけを用いる傾向がある。
yōta 38/ 84 (45%) 33/38 86%が30才以上	yotta 13/84 (16%) 10/13 80%が30才以下	合計が84にならないのは、この形を使用しない人がいるためである。

この観察は非常に興味深いものであるが, アクセントとの関連性について述べられていないのが残念である。また, 同じページに40才以下の人の発音として載っている表のうちで, Negativeのoran及びorankattaのoが短いのは筆者の直観には合わないし, そういう形を聞いたことはない。ūran及びūrankattaのuが全部長いことを考えると, Talbot氏が聞き間違えたのではないと思われる。

樺垣(1961: 13)に各地方の<降る>という動詞の動作態(継続相)及び結果態(完了相)が載っているが, 岡山市の欄には, ラリヨル, ラットルという形が載っている。

- 9) 岡山標準語と岡山方言を並べてみると次のような関係がある。

岡山標準語	岡山方言		
1 a. ta'bete 2iru	ta'bjooru		〈食べている (継続相)〉
b. ta'bete 2iru	ta'betoru		〈食べている (完了相)〉
c. ta'bete 2oku	ta'betoku		〈食べておく〉
d. ta'bete 2ageru	ta'beta _g eru		〈食べてあげる〉
e. ta'bete 2aru	ta'bete 2aru	* ta'betaru	〈食べてある〉
f. ta'bete 3imau	ta'be _{ff} imau		〈食べてしまう〉
g. ta'bete jaru	ta'bet _f aru		〈食べてやる〉
h. ta'bete kureru	ta'bete kureru	* ta'bekkureru	〈食べてくれる〉
i. ta'bete morau	ta'bete morau	* ta'bemmorau	〈食べてもらう〉
		* ta'benmorau	
2 a. sutete 2iru	3it3o'oru		〈捨てている (継続相)〉
b. sutete 2iru	3iteto'ru		〈捨てている (完了相)〉
c. sutete 2oku	3iteto'ku		〈捨てておく〉
d. sutete 2ageru	3iteta _g eru		〈捨ててあげる〉
e. sutete 2a'ru	3itete 2a'ru	* 3iteta'ru	〈捨ててある〉
f. sutete 3ima'u	3ite _{ff} ima'u		〈捨ててしまう〉
g. sutete jaru	3itet _f aru		〈捨ててやる〉
h. sutete kureru	3itete kureru	* 3itekkureru	〈捨ててくれる〉
i. sutete marau	3itete marau	* 3itemmorau	〈捨ててもらう〉
		* 3itenmorau	

これらのうちで a と b は岡山標準語と岡山方言とで形態素が異なる。たとえば 1 a は岡山標準語は /tabe&te ir&ru/ 岡山方言は /tabe&t = or&ru/ あるいは /tabe&te = or&ru/ あるいは /tabe&tor& ru/ である。c については、2 c からわかるように岡山標準語と岡山方言ではアクセントが異なっているので、両者を単純に結びつけるのは注意を要する。やはり岡山標準語と岡山方言とでは基底形が違っていると考えられる。1 c の場合岡山標準語は /tabe&te 2ok&ru/, 岡山方言は /tabe&t = ok&ru/ あるいは /tabe&te = ok&ru/ あるいは /tabe&tok&ru/ である。残りのもので d は縮約が起こるのに e は起こらない理由はよくわからない。結果的には d のほうが e より結びつきの程度が大きいということになるのであろうが、これはもちろん説明になっていない。f と g が縮約を起こすのに対し h が起こさない理由もよくわからない。やはり結果的に f や g のほうが h より結びつきの程度が大きいということになるのであろうがこれももちろん説明になっていない。i については、mm という音連鎖が許容されないものというほかはないのであろうが、Nm でも許容されないのはなぜかについてはわからない。

- 10) 岡山方言Ⅰ, Ⅱのスタイルでは ta'be, ka'ke 3ite'e, jare'e であるので、少し事情が違っている。これらの形自体は、岡山方言Ⅲの形にさらに母音短縮の規則を適用すれば得られるが、歴史的には岡山Ⅰ, Ⅱのほうが古いわけであるから、これは直観に合わないことになる。歴史的にはおそらく ta'be, ka'ke, 3ite', jare' というさらに古い形があったものと思われる。

より古い形	岡山方言Ⅰ, Ⅱ	岡山方言Ⅲ
ta'be	ta'be	ta'bee
ka'ke	ka'ke	ka'kee
3ite'	3ite'e	3ite'e
jare'	jare'e	jare'e

参考文献 (追加)

- Talbot Alan (1979) *Japanese as she is spoke in Okayama* (『岡山の日本語』) 岡山市浜462 桑山哲郎 発行
 都竹通年雄 (1951) 「動詞のアクセント」 寺川喜田男, 金田一春彦, 稲垣正幸編『国語アクセント論叢』法政大学出版局
 樺垣実 (1961) 「西部方言概説」 東条操監修『方言学講座 第三巻 西部方言』東京堂 2-18

1984年10月17日